

森田猛著

## 『ブルクハルトの文化史学』

——市民教育から読み解く——

渡辺和行

ポストモダンの哲学がニーチエの再評価をもたらしたように、ポストモダンの歴史学はブルクハルトの再評価をもたらした。両者はともに近代批判という点で共通性を持っており、ブルクハルトは、その近代批判ゆえにルネサンスの文化やギリシア文化史へと関心を深めていった。それゆえ、ブルクハルトは一般に美術史家とか文化史家と評されている。この点で、ブルクハルトはポストモダンの歴史学と交差する。なぜなら、ポストモダンの歴史学とは社会史であり、とりわけポストモダンの時代と重なる第三期の社会史とは文化社会史であるからだ。その先駆者が、『イタリヤ・ルネサンスの文化』（一八六〇年）を著したブルクハルトであった。今日の文化史は、その外延を広げて政治文化・法文化・宗教文化・学校文化・企業文化・習俗などをも含む広義の文化を対象としている。それは、ピーター・パークの『文化史とは何か』（増補改訂版、長谷川貴彦訳、法政大学出版局、二〇一〇年）や『思想』の「ピーター・パークの仕事——文化史研究の現在

——」（二〇七四号、二〇一三年）を續けば、一目瞭然である。つまりブルクハルトの文化史は、二〇世紀後半に再評価され継承発展させられたことになる。それでは二一世紀の今日、ブルクハルトを論ずる意味はどこにあるのだろうか。その一つの方向性を指し示したのが本書である。

著者は、「あとがき」のなかでブルクハルトとの出会いについて記している。マイネットワークを介してブルクハルトに出会ったという著者の内発的なモチーフに加えて、ここでは外発的な理由を指摘しておきたい。著者が同志社大学文学部文化史学専攻（現在は同志社大学文学部文化史学科西洋文化史コース）の出身であることが示すように、著者は意図せずしてブルクハルトの文化史学を考察する最良の環境にいた。しかも、著者が大学に入学した一九八〇年は、日本でも社会史ブームが巻き起こり、構造論的歴史学や系列史としての社会史から心性史や歴史人類学としての社会史へと転回を遂げつつあった時期である。フランスでもロジェ・シャルチエの読書行為の社会史やアラン・コルバンの感性の歴史学が脚光を浴びていた。こうした四囲の状況が、著者をして文化史に関心を持たせたのだろう。さらに、本書が歴史教育者としてのブルクハルトに光を当てていることについては、著者の指導教員（望田幸男氏）が当時、教育社会史研究のバイオニアであったことも影響しているだろう。第三章の副題「プロフェッショナルリズムの時代」は、まさに望田氏の専門職研究との関係を推測させるに十分である。このように、著者の内発的動機と外発的状況が交差することで著者の基本モチーフが姿を現したのである。本書はブルクハルトの史学史研究であるが、類書と違うのは歴

史教育者ブルクハルトに焦点を当てていることである。著者のライトモチーフは教職に生きた歴史家ブルクハルトにあった。レーヴィットのブルクハルト論冒頭の文章、すなわち「ブルクハルトは学問という営為に貢献しようと思ったのでもなければ、単なる個人的感慨を吐き出そうと思ったわけではない。彼は教師でありたいと欲したのである。半世紀を通じブルクハルトはいちばん高い意味において大学の歴史の教師であった」（カール・レーヴィット、西尾幹二・瀧内楨雄訳『ヤーコプ・ブルクハルト』TBSブリタニカ、一九七七年、I頁）を導き手として、本書は学生や市民に歴史を教授したブルクハルトに注目する。

なぜこの視座が斬新なのかは、研究史を振り返ったときに明らかとなる。従来のブルクハルト研究は、ブルクハルトの歴史思想や文化史学の方法に焦点が当てられてきた。著者は本格的な研究史を記していないので、邦語文献のなかに本書を位置づけるためにも、邦語文献のブルクハルト論の特徴を以下に摘記しよう。

これまで、翻訳も含めて単著の邦語ブルクハルト論は五冊出ている。既述のレーヴィットの研究（原著、一九三六年）、フリードリヒ・マイネッケの講演（中山治一・岸田達也訳『ランケとブルクハルト』創文社、一九六〇年、原著一九四八年）、仲手川良雄『ブルクハルト史学と現代』（創文社、一九七七年）、下村寅太郎『ブルクハルトの世界』（岩波書店、一九八三年）、下村寅太郎著作集第九巻『ブルクハルト研究』みすず書房、一九九四年に再録。本稿では著作集を利用）、そして本書である。つまり、本書は日本人の手になる三冊目のブルクハルト論ということになる。

レーヴィットのブルクハルト論は、ニーチェやキエルケゴール

との比較など哲学的アプローチに特色があり、ブルクハルトの学問観・歴史観・政治観を論じはしたが、歴史教育者ブルクハルトを論じることにはなかった。ブルクハルト自身、「学問的な著述は最も不健康なものの一つであり、講義だけするということは（それがどんなに困難なものであり、それに要する研究と準備がどんなに詳細をきわめていても）この世の最も健康な職業である」（レーヴィット、一〇八頁）と述べており、レーヴィットが「大学の歴史の教師」としてのブルクハルトを正しく認識していただけに、なぜ教育者としてのブルクハルトを深めなかったのか、著者ならずとも疑問が残る。

マイネッケのブルクハルト論は、悲惨なナチズム体験後に改めてブルクハルトの現状認識に示された先見の明に感銘し、ランケ的な政治史ではなくてブルクハルトの文化史を評価する論考である。マイネッケは、一九四七年の講演のなかでこう述べていた。「われわれにとつても、またわれわれの後に研究する者にとつても、結局はブルクハルトの方がランケよりもいっそう重要なものとなるのではなからうか。……ブルクハルトは、自分自身の時代の歴史的本質をばランケよりもいっそう深くいっそう鋭く洞察していた。したがって未来をもまたランケよりもいっそう明確にいっそう確実に予見することができたのである。……ブルクハルトの卓越性は、現在および未来についての判断にある」。この判断とは、未来の透視者ブルクハルトが「二〇世紀の大衆社会、すなわち「退化した大衆的人間」を、「二〇世紀の問題性を予見していた」（マイネッケ、五〇七、三七、一一二頁）ことによる。

史学史家の仲手川良雄氏は、ブルクハルトの歴史観・時代認

識・歴史主義・歴史的偉大さなどをオーソドックスに論じている。哲学者の下村寅太郎氏は、第一に美術史家としてのブルクハルト、ついで文化史家・歴史哲学者としてのブルクハルトに焦点を当てた浩瀚な研究を著し、そのブルクハルト評価には瞠目すべき指摘もある。ブルクハルトが、パーゼル大学で美術史の講義を三五年間にわたって続けたところにも、文化史としての美術史を重視していた様を窺うことができる。しかし、下村ブルクハルト論はブルクハルトの翻訳も少なかつた時期ゆえであろうか、作品の紹介にも紙幅を費やしており、研究ノートの趣がなきにもあらずという読後感が残るのも事実である。

このように研究史を概観すると、本書の特色が「もっぱら自己の教職に生きた」（自伝中の言葉）ブルクハルトにあることが理解できるだろう。歴史教育者ブルクハルトという視点から、彼の歴史観・歴史講義録・講演・文化史の方法などが読み直される。その意味で本書は、教育者ブルクハルトという新しい視点によるブルクハルト論の「チチエローネ」となった。

評書  
それでは、短い序章と終章、本論六章と補章からなる本書の内容を要約しよう。著者は、序章「教育としての歴史」で先述のライトモチーフを開陳した。第一章「市民の教育者としてのブルクハルト」は、ブルクハルトが行った大学の講義・大学予科の授業・市民向けの公開講演の三つについて触れると同時に、受講生が保守的なパーゼルの教養市民層であったことやパーゼルの文化的空間について分析を加え、パーゼル市民のために著述したブルクハルトを力説する。第二章「革命時代の人間」は、ブルクハルトがパーゼル大学で二〇年間にわたって講じた「革命時代史」を

「ギリシア文化史」と比較しつつ、ブルクハルトの時代認識、およびブルクハルトが時代の本質や課題をどう捉え、どのように講義を通して伝えたのかを解明した。著者は、ブルクハルトが小国家的な市民生活や市民的自由という「古いヨーロッパの教養」を重視し、返す刀で革命時代の病理を人間のエゴイズムに見出し、啓蒙主義のオプティミスティックな性善説的教説を批判し、ペシミスティックな人間観や社会観を対置したと主張する。第三章「ランケの遺産と近代歴史学」では、ランケの二つの遺産（実証的な批判的分析と普遍的な総合的叙述）の内、ランケ学派が継承しなかつた後者の遺産をブルクハルトが講義や講演を通して承継し、これによって、ブルクハルト史学が些末実証主義の弊害を免れえたことを述べる。

第四章「ニーチェへの応答」は、歴史学の科学化と専門職化が「生」に対する歴史の弊害をもたらしたというニーチェの歴史批判に対して、ブルクハルトが「繰り返すもの、恒常的なもの、典型的なもの」に注目する文化史学の方法と教育実践によって乗り越えんとしたことを描く。また、ブルクハルトが専門家による科学的な歴史研究よりも、「ディレクタントによる歴史術的な文化史研究」を重視したことも併せて述べた。第五章「普仏戦争期の文化史学」は、ドイツ統一による「大国家」の誕生という時代の転換のなかで、ブルクハルトの講義が「古いヨーロッパの教養」を救い出すべく、多様なヨーロッパや歴史的偉大さの回復に注力されたことが語られる。第六章「人間精神の危機」では、ブルクハルトの教育活動の基底にあったものが、危機の時代における教養市民層の歴史的役割、すなわち多様で自由なヨーロッパを維持

することを「特別な義務」として教養市民層に教授することになったと述べられた。本論を要約した短い終章に続いて、補章「革命時代の《指導者》としてのルネサンス」が置かれ、なぜルネサンスが「わたしたちの時代の指導者」と呼ばれねばならないのかを論じた。

評者は、ブルクハルトの専門家でもドイツ史学の専門家でもない。一九世紀フランスの史学史を学んだことがあるというにすぎない。そうした立場から、以下何点かコメントを加えよう。

第一に歴史教育者ブルクハルトについてである。本書からは、教養市民層の育成のために歴史教育に情熱を注いだブルクハルトがよく伝わってくるが、教育者ブルクハルトに力点を置くと、同時代的文脈を考慮に入れる度合いが高まり、歴史教育の本質といった時代を通観する視点は弱まるというデメリットはないのだろうか。また、ブルクハルトの歴史叙述の理念が「像(Bild)」の形成にあるとすれば(下村、四七〇頁)、ブルクハルトが歴史教育の役割を人間形成、すなわち「教養(Bildung)」に置いたことは必然であろう。もちろん、ブルクハルトが歴史学の使命を専門家の養成ではなく「教養」にあると考えたのは、小規模なバーゼル大学(学生総数一五〇〜一六〇名)に勤務したことも大きいだろう。ブルクハルトが教育に情熱を注いだ様子は、一八五回もの講演や公開講義、それに加えて大学などでの講義に邁進し、休講は一八九一年の事故による一回だけというところにも表れている。ブルクハルトは、何よりも「教養なき専門人」「文化なき専門人」を憂えたのだろう。

今日の大学が置かれている状況からすると、教養教育と専門教

育との連関やアカデミック・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに相当するものについて、ブルクハルトがどのように考えていたのかまで踏み込んで論じていただけでは、ブルクハルトがいかなる人間を養成しようとしたのか具体的に理解でき、二一世紀の歴史教育にとっても裨益するところ大であろう。さらに、公開講義の内容分析などによってその特徴を明快にできれば、教職に生きた歴史家の側面を際立たせられるだろう。中谷博幸氏の研究を読むとそうした思いを禁じえない(中谷博幸「ヤーコプ・ブルクハルトの公開講義」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第一三三号、二〇〇八年)。もともと、上層中産階級の出身と推測される数十名の受講生を相手にする講義と、義務教育導入後の歴史教科書の執筆による歴史像の提示とは、その影響力の相違は大きいと推量されるが、ブルクハルトはあくまでも教養市民層に「古きヨーロッパの教養」を伝授すべく努めたということなのだろうか。この点で、歴史教科書の執筆に健筆を振るい、「政治教育の道具としての歴史教育」に共和的市民形成を託した第三共和政期フランスの歴史家との違いを痛感せざるをえない。

第二に「歴史と詩の序列論争」から派生する問題である。ブルクハルト自身は序列論争に賛否を述べなかつたというが(本書、一五二頁)、彼はこの論争はショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』によって最終的に決着がつけられたと認識していた(ブルクハルト、藤田健治訳『世界史的諸考察』二玄社、一九八一年、七四頁)。またブルクハルトは、歴史は直観によって支配される詩だとも述べている。アリストテレスが、個別的なもの

を叙述する歴史より普遍的なものを語る詩を重視したことは有名であるが、下村氏は、ブルクハルトの歴史叙述は「普遍的なものを語る詩」たることを意欲しているとか、アリストテレスの意味での「詩」は、ブルクハルトが述べる「繰り返すもの、恒常的なもの、類型的なもの」を体系的に叙述する「文化史」に対応すると述べている（下村、四五―四五二頁）。著者も同様の見解のようだが（本書、一六三頁）、ブルクハルト自身、歴史学は法則定立的科学ではなく、「歴史法則」は不正確だとも記している（『世界史的諸考察』二二五頁）。ということは、ブルクハルトは歴史学を個性記述的科学と考えていたのであるうか。ブルクハルトは「普遍的なものとは偉大な個人に集約されてきた」（本書、二二二頁）と述べており、偉人や個人に注目する点で歴史主義の枠内にあるとも言える。

一九世紀の思潮としてドイツの歴史主義とフランスの実証主義という対抗が見られたことは通説となつてはいるが、ブルクハルトの歴史観は歴史個体に執着するドイツ歴史学とは距離を置いていられるように思われるので、ブルクハルトの歴史主義や実証主義に対する見解についても少し触れてきたかった。それは、ラングケ学やベルリンからの距離とパラレルな関係にあるのか、史学史的にも重要な論点だろう。南欧と北欧の境界、ドイツとフランスの狭間に位置するスイスのバーゼル、ドイツ文化圏の周縁バーゼルに居住し、学問の中心であるベルリン大学への招聘も固辞したブルクハルトの本質に迫る問題が、そこに胚胎しているの  
 ではないだろうか。

第三にフランスの歴史家との関係についてである。ブルクハルト

トが、ジュール・ミシュレのルネサンス論（『世界と人間の発見』）に刺激を受けたことは周知の事実であるが、ミシュレとブルクハルトの関係はルネサンス論にとどまらないのではないだろうか。ブルクハルトは『世界史的諸考察』（四五、一九六、一九八、二六五頁）のなかで、エルネスト・ルナン『現代の諸問題』（一八六八年）やエドガール・キネの『革命』（一八六五年）をたびたび引用している。ミシュレとキネは、一八五二年にコレージュ・ド・フランスを追われたが、キネは一八五八―七〇年の間、スイスのレマン湖東端にあるヴェイトーに仮寓中で、一八六七年にはミシュレもキネのもとを訪れたりしている。しかもブルクハルトとキネは、とある葬儀の場で出会っている。バーゼルに亡命していたジャン・バティスト・アドルフ・シャラスが一八六五年一月下旬に死去した際である。ブルクハルトは、シャラスを「私がかつて近づきになつた人の中で最も非凡な人間」と評している（ヴェルナー・ケーギ、坂井直芳訳『ブルクハルトとヨーロッパ』みすず書房、一九九〇年、七一頁）。シャラスの葬儀にキネとミシュレの優れた門人の一人、シャルル・ルイ・シャサンも参列していた（ケーギ、七四頁）。望蜀を承知で続けると、ブルクハルトがミシュレの読者であつた以上の関わりがなかったのか是非知りたいところである。ミシュレ以外にも、オーギュスタン・チエリや美術史家テーヌなど、フランス側の知識人との学問的な関係や影響ほどの程度あつたのかについても論及していただきたい。

第四にヘイドン・ホワイトの指摘についてである。本書は特にホワイトに論及していないが、二一世紀にブルクハルトを論ずる

にはホワイトを避けて通ることはできないだろう。ホワイトは、一九世紀に近代歴史学が誕生して以来、歴史学は「一〇〇〇年以上の結びつきがあったレトリック」から切り離されただけでなく、「アマチュアやディレッタントたちの創作活動」、「想像力や直観、情念、さらには偏見」など、「より創造的で詩的な種類の叙述」が切り捨てられたと述べている（ヘイドン・ホワイト、佐藤啓介訳『実用的な過去』『思想』一〇三六号、二〇一〇年、一七頁）。

つまりブルクハルトの歴史学は、直観やディレッタントの重視に窺えるように、まさに切り捨てられようとしたものの擁護ではなかったのか。また、ホワイトは『メタヒストリー』のなかで、ブルクハルトは諷刺・反語のスタイルを用いた歴史家だと位置づけつつ、真のブルクハルトは二つのブルクハルト論（国民主義の進行・工業化・大衆化による文化の墮落に対する鋭敏な批評家としてブルクハルトを称える見解と、ショーペンハウアー哲学の影響下で発展過程や因果関係について十分とはいえない歴史観を持つた知識人としてブルクハルトを貶める見解）の間にではなくて、二つのブルクハルト論の下にあると述べている。これらの指摘をどう考えたら良いだろうか。あるいは、ブルクハルトの三つのポテンツ（国家・宗教・文化）について、ホワイトは「文化が榮えるのは、国家と宗教という強制力が弱体化したがゆえに、その強制力が文化の内奥の推進力を妨げえなかったときだけである」と

語るブルクハルトを引用している（Hayden White, *Metahistory, the Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, Baltimore, 1973, pp.233-234, 249）。一九世紀に集権化と世俗化が進行し、政治の地位向上と宗教の地位低下を目標とした近代には文化は育たないということなのであろうか。言語論的転回や文化論的転回後の今世紀、ブルクハルトの文化史の意義を再考するためには、歴史教育者ブルクハルトに加えてやはり歴史研究者ブルクハルトをも考察する必要があるのではないか。近代に切り捨てられた修辭の力や詩的な歴史叙述を再考するためにも、ホワイトの指摘に応答する必要があるのではないだろうか。

第五にブルクハルトのルソー観についてである。ブルクハルトは「革命時代」をもたらししたルソーを思想的に嫌悪しているが、ルソーもブルクハルトもともに墮落史観を抱いていたという共通性がある。社会契約論を唱えたジュネーヴ市民ルソーと文化史を唱えたバーゼル市民ブルクハルトの違いは、何であろうか。個人的資質の相違に加えて、バーゼルとジュネーヴという地理的・文化的・言語的空間の相違も大きいのであろうか。これは著者への注文ではなくて、評者自身の課題である。

（A5判 viii+二八八+三二頁 二〇一四年六月）

ミネルヴァ書房 税別六五〇〇円  
（奈良女子大学研究院（人文科学系）教授）